

日本小児はり学会 第10回特別講習会

「夜尿症」テーマに

ガイドライン踏まえた治療を

日本小児はり学会の第10回特別講習会が6月12日、オンラインで開催された。

日本夜尿症学会が5年振りに改訂した『夜尿症診療ガイドライン2021』を踏まえて、鍼灸師の本城久司氏（アイスリーメディカ



本城久司氏

ル株式会社統合医療教育研究センター長、京都府立医科大学大学院泌尿器外科学科大学大学院泌尿器外科学科客員講師）が講演した。夜尿症は5歳以上の小児の就寝中の間欠的尿失禁で、1カ月に1回以上の夜尿が3

カ月以上続くことなどを定義とし、その上で、昼間の尿失禁がない「単一症候性夜尿症」と、昼間の下部尿路症状を伴う「非単一症候性夜尿症」が分類されると解説した。今回の改訂版

は、前版ではあまり触れられていなかった非単一症候性夜尿症の対応が中心に記載されたとした。夜尿症治療には、デスマプレシンなどの薬物療法やアラーム療法があると述べ、アラーム療法とは、患児の下着に電極をつけて尿で濡れるとアラームが鳴る条件づけ訓練法であり、最も推奨度の高い治療法と紹介した。

本城氏は、夜尿の主な原因に夜間多尿と覚醒閾値の上昇が考えられるとして、

膀胱機能改善だけでなく、睡眠障害を改善し覚醒閾値の正常化を図ることを提案。アラーム療法や薬物療法の併用療法としての鍼治療介入の立ち位置を述べた。また、直腸内に大きな便塊があると膀胱が圧迫されるため、便秘が尿失禁の原因としても考えられると

夜尿症治療を頑張る患児を褒めよう

して、新たなガイドラインで便秘の有無確認についての診療アルゴリズムに初めて掲載されたことは当領域の大きな進歩だと強調した。特に非単一症候性夜尿症の治療においては便秘の精査と加療が非常に重要とし、今後は便秘治療も視野に入れる必要性を説いた。

中村真理氏（まり鍼灸院長）により弁証別小児遺尿の症例、首藤順子氏（賢昌鍼灸院長）により大師流小児はりの症例が報告されたほか、村本早希氏（さきレディース鍼灸院長）は、三環系抗うつ薬の薬物療法に親御さんが不安を感じて鍼治療にいられた症例を発表。そのあとの質疑応答では、改善の早い患児と時間のかかる患児との違いなどの話題が上がり、意見が交わされた。これを受け

の症例報告の共通点として便秘の有無を確認していることに触れつつ、「まずは、難治性の夜尿症の治療を続けている患児を褒めよう。夜尿症への偏見をなくしていくよう親御さんの意識を変えていこう。患児と親御さんのモチベーションを上げるために、鍼灸師は些細な変化にも気づいて、励ましていこう」と呼びかけた。

このほか、蔡曉明氏（蔡鍼灸院長）による講演『夜尿症の中医治療法』も